

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

# 社会的養護におけるライフチャンス保障ー児童養護施設退所者の生活状況に関する量的・質的分析から

著者	永野 咲
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	社会福祉学
報告番号	32663甲第390号
学位授与年月日	2016-03-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008443/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008443/</a>

氏 名（本籍地）	永 野 咲（神奈川県）
学 位 の 種 類	博士（社会福祉学）
報告・学位記番号	甲第390号（甲福第53号）
学位記授与の日付	平成28年3月25日
学位記授与の要件	本学学位規則第3条第1項該当
学 位 論 文 題 目	社会的養護におけるライフチャンス保障 —児童養護施設退所者の生活状況に関する量的・質的分析から—
論 文 審 査 委 員	主査 教授 小 林 良 二 副査 教授 博士（社会福祉学） 佐 藤 豊 道 副査 教授 博士（社会福祉学） 秋 元 美 世 副査 教授 森 田 明 美 副査 元本学教授／日本女子大学教授 博士（教育学） 林 浩 康

### 【論文の要旨】

21世紀に入って、それ以前とは異なる大きな経済社会の変動が指摘され、社会的格差の拡大とともに社会的弱者に対する制度的な対応の不備が指摘されるようになった。これらは、社会的排除や制度の隙間などの概念によって語られている。

特に子どもの領域では子どもの貧困、児童虐待、DV被害などのさまざまな社会問題が噴出しており、それへの対応が大きな課題になっているが、これまでの社会福祉の制度や支援がこうした状況に対してどこまで対応できているかを明らかにすることは、社会福祉研究にとって喫緊の課題である。

永野咲氏の学位請求論文『社会的養護におけるライフチャンス保障—児童養護施設退所者の生活状況に関する量的・質的分析から—』は、そのような社会的不利が最も端的に指摘されているにもかかわらず、これまで必ずしも十分なアプローチが行われてこなかった社会的養護経験者に関する量的・質的把握を行い、その体系的な理解をめざして執筆されている。

本論文の構成は以下の通りである。

### 序 章

#### 第1章 新たな概念「ライフチャンス」の導入

第2章 社会的養護措置解除後の生活状況に関するこれまでの研究

第3章 社会的養護措置解除後の生活実態とデプリベーション—ライフチャンスの量的把握

第4章 社会的養護のもとで育った21人へのインタビュー調査—ライフチャンスの質的把握の方法

第5章 社会的養護のもとで育った若者のライフチャンス—ライフチャンスの質的把握

第6章 ライフチャンスと「生の不安定さ」

第7章 結論：社会的養護におけるライフチャンス保障

おわりに

以下、各章の内容を要約する。

序章では、研究の背景と目的、及び、研究の視点と方法について述べている。研究の背景としては、子ども期を社会的養護（主には児童養護施設であるが、乳児院、里親家庭、母子生活支援施設、自立援助ホームなどでの生活経験者を含む）のもとで過ごした若者たちに不利が集積しており、社会的養護を巣立つ若者の多くが、進路選択や社会生活への移行過程でさまざまな困難に直面するという状況があり、これに対しては、社会的養護経験者の生活実態についての十分な量的・質的研究が必要であるとする。

第1章では、こうした研究を行うためには、抽象度の高い一般的な概念を用いる必要があるとして、ドイツ（のちにイギリス在住）の政治社会学者であるラルフ・ダーレンドルフ（Ralf Dahrendorf）が提唱した「ライフチャンス」の概念を検討している。ダーレンドルフは、「ライフチャンス」を、「社会構造によって付与される個人の発展のための可能性」とし、その構成概念として「オプション（options）」すなわち、社会構造が付与している〈選択可能性〉と、「リガチュア（ligatures）」すなわち、「帰属・社会的つながり」の2つに分けて議論している。ダーレンドルフによると、社会的に構築されるさまざまなオプションも重要であるが、その際の選択の基礎となるリガチュアが重要であるとし、リガチュアは行動や選択に意味を与える場合もあるし、拘束ともなりうるとする。この研究では、以上を踏まえて、ライフチャンスを「オプションとリガチュアの相互作用により決定される行動の機会」、オプションを「社会的に構築され、未来に開かれる選択肢」、リガチュアを、「社会的に構築されたつながりの状況」と定義して議論を展開している。

第2章では、社会的養護を措置解除となった若者の生活状況に関する先行研究を検討している。その結果、日本においては、児童養護措置解除後の若者の生活状況に関する量的研究が決定的に不足していること、また、インタビューなどによる質的な調査はおこなわれているが、一定の分析手続きに則った体系的な方法による把握が欠如しているという。

第3章では、社会的養護措置解除後の生活状況を量的に把握するため、2つの調査によ

る一次データの分析と4つの自治体によって行われた公開データを用いた二次分析を行っている。その結果、「オプション」としての教育機会については、社会的養護のもとでの高校中退率の高さ、大学等進学率の圧倒的な低さが見られ、また、就労状況についても、同年代の若者と比較した際の雇用状況に大きな格差がみられること、さらに、経済的状況については、措置解除者の生活保護受給率が同年代の受給率よりもはるかに高いこと、生活移行の状況については職業および住居において困難が集積される傾向がみられることなどが統計を用いて説明されている。

「リガチュア」については、施設退所後3か年ですでに約3割の退所者が施設と連絡を取れない状況になっていること、また、司法や精神保健、公的保護の介入・支援を必要とする特別なニーズをもち、周縁化される退所者も少なくないことなどが統計的に説明されている。

第4章では、ライフチャンスの質的把握のために実施したインタビュー調査とその分析方法について論じている。まず、インタビュー協力者21名の概要が紹介され、インタビューの結果を佐藤による「質的データ分析法」を用いて分析すること、その際、ダーレンドルフのライフチャンスの概念を構成するオプションとリガチュアを参照しながら、「オプション」については、衣食住等の安心安全な生活に関する状況である「基礎的オプション」、教育や就職、社会活動の機会等に関する「選択的オプション」の概念的カテゴリーが得られ、「リガチュア」については、「家族のリガチュア」、「施設（ケア）のリガチュア」、「社会のリガチュア」の3つの概念的カテゴリーを用いるとする。さらに、これらの「オプション」と「リガチュア」とは相対的に独立し、それらの根底にある「生の不安定さ」という概念的カテゴリーが抽出されたとする。

これらの諸概念とともに、調査協力者の「生活の場」の変化に着目して、①入所前の環境（家庭、乳児院）、②退所先の環境（家庭・親類宅、社会）、③再入所の有無（再入所あり、再入所なし）という3つの分岐点を用いた分析の結果、(1)家庭復帰タイプ、(2)家庭からの入所・退所タイプ、(3)再保護タイプ、(4)乳児院からの入所・退所タイプ、の4つのタイプを得ている（図1）。

このような、ライフチャンスに関する概念構成と4つの調査協力者のタイプを用いた質的分析の結果を第5章で述べている。

第5章では、4つのタイプごとのライフチャンスを分析しているが、その結果は次のとおりである。

(1)「家庭復帰タイプ」は、家庭または乳児院から施設に入所し、家庭へ退所（家庭復帰）したタイプであるが、児童養護施設では、幼少期の養育困難に対して養育の補完が行われている。施設から家庭に復帰した後は、基礎的オプションの一時的な低下が生じるものの、再保護の必要はなく、家族のつながりの中で大学等進学の選択的オプションを比

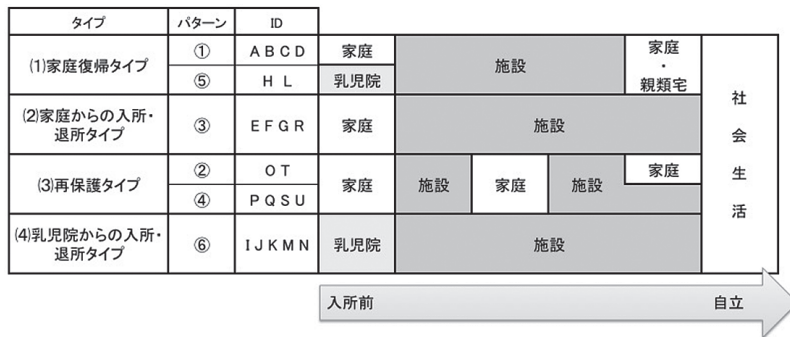


図1 調査協力者の4つのタイプ

較的得やすい傾向がある。また、親子関係が再構築され生活も徐々に安定していくことが多いが、再統合の過程で家族に対する精神的葛藤も起こりやすく、ケアが必要である。

(2)「家庭からの入所・退所タイプ」は、家庭から施設へ入所し、18歳まで施設で生活した後に「自立退所」をしたタイプである。家庭でのネグレクト等によって、基礎的オプションが欠如しているが、施設による養育の代替によって基礎的オプションが回復し、義務教育の機会も回復する。高校卒業まで継続して施設で暮らすことで、安定した学生生活が送れることも特徴といえる。一方で、家族のリガチュアは途絶えているか決別しており、退所後の生活を自身で成り立たせる必要があり、施設の養育者からの進学イメージの提示などの積極的な取り組みがなければ、大学等進学が具体的な選択肢となることは難しくなる可能性がある。

(3)「再保護タイプ」は、家庭から施設等へ入所した後に家庭復帰したが再保護となり、18歳で施設から家庭復帰または「自立退所」をしたタイプである。家庭で深刻な虐待により制限されていた基礎的オプションは保護・入所により回復する。しかし、家庭復帰となった後、再び過酷な状況に戻る可能性もある。再保護・入所によって再び生活は回復するが、入退所の繰り返しによって、基礎的オプションだけでなく、義務教育の機会などの選択的オプションも断続的な状態となる。さらには、身近な他者との関係性の分断が繰り返えされることで、リガチュアの維持が困難になる。さらに、これまでの経緯から周囲を頼れなかったり、家庭でうけた虐待の精神的な影響が継続していることも多く、これに対するケアや奪われた主体性の取り戻しが大きな課題となる。

(4)「乳児院からの入所・退所タイプ」は、乳児院から施設に措置変更となり、18歳まで施設で生活した後、「自立退所」したタイプである。幼少期から社会的養護のもとで暮らしており、一度も家庭での暮らしを経験しておらず、親との交流もほとんどない。施設での暮らしが最も長く、施設を生活の場として捉えており、基礎的オプションは最も安定していると考えられる。一方で、集団生活の影響を最も長くうけるため、施設の養育が

不適切だった場合には、心身へのダメージが大きくなる危険性もある。さらに、入所理由や生い立ちについて正確な情報を知らされていないため、自分の出自について不明なことが多いのも特徴である。このため、自信がなく、将来の目標を持ちにくい傾向があり、また退所後に頼れる家庭がないため一度躓くと一気に深刻な生活困窮に陥りやすい傾向がある。

第6章では、分析の過程で得られたもう一つの概念的カテゴリーである「生の不安定さ」、すなわち、「アイデンティティの根幹にある『生まれ』と『生きる』ことの揺らぎ」について説明している。本研究で取り上げた事例を検討すると、「生の不安定さ」には、①「生」が「不明」であること、すなわち、自身の「生まれ」の状況が明らかでないこと、②「生」が「否定」されること、すなわち、保護者からの抑圧によって自身の「生」が否定されること、③「生」が「混乱」すること、すなわち、自身の「人生」のアイデンティティやルーツが揺るがされることなどが含まれている。

特に、第5章で述べた(4)「乳児院からの入所・退所タイプ」は、幼少期からケアのもとに置かれるために「生」が「不明」であることによる不安定さが多くみられ、(3)「再保護タイプ」には、被虐待の経験が多く「生」が「否定」されることによる不安定さがみられた。このような「生の不安定さ」がリガチュアに葛藤を生じさせ、オプションについての実質的な選択を困難にし、ひいてはライフチャンスに大きな影響を与えるとされる。

こうした「生の不安定さ」に対しては、知らされた生い立ちを「整理」すること、他者や自分自身によって「生」が受け止められること、境遇に肯定的な意味付けを行うことなどのプロセスを通して、社会的養護を必要とした自分の「生」が肯定にむかっていく可能性も示されている。

第7章では、以下の分析を踏まえて、次のような結論を得ている。

第1は、ダーレンドルフのライフチャンスの概念と本論文で用いているライフチャンスの概念との関係である。本研究では、ダーレンドルフのライフチャンスの概念から着想を得るとともに、量的研究やインタビューによる質的研究によって、ライフチャンスの概念を構成し、「オプション」については「基礎的オプション」と「選択的オプション」、リガチュアについては「家族のリガチュア」、「施設のリガチュア」、「社会のリガチュア」などの概念的カテゴリーを用いている。このような概念構成になったのは、ダーレンドルフが社会成員全体を対象に理論を組み立てたのに対し、本研究では、子どもや若者を対象として家族から社会へ移行する過程を分析した結果であろうとされる。

また、この研究の過程で、ダーレンドルフが規定したオプションとリガチュアだけでは、捉えきれない「生きること」の課題、すなわち「生の不安定さ」が存在することと、それによってライフチャンスの選択が極度に制限されかねないものとなっている。

第2に、社会的養護のもとでの得られるライフチャンスの回復と制限については、社会



的養護への措置によって、基礎的オプションや選択的オプションの回復（義務教育の回復、高校進学機会）がみられ、また、足枷的であったり、欠如していた家族のリガチュアを施設のリガチュアが補完・代替するとしている。一方で、措置後の新たなつながりとなる施設リガチュアは集団生活の中で十分形成されておらず、退所後には途絶えてしまう可能性も見られた。さらには、一般的に家族という強固なりガチュアのもとにある子ども期に家族とのつながりが分断されることにより、「なぜ家族と（が）いないのか」、「なぜケアのもとにいるのか」という問いかけに対しては、十分な対応が行われているとは言えず、大きな葛藤が存在するとされる。

第3に、社会的養護におけるライフチャンス保障に向けた社会の課題としては、社会的養護のもとで育った若者のライフチャンスは、同年代の若者との大きな格差がみられるため、この是正のためには、社会的養護にまつわる関連制度の大規模な改革が必要不可欠であり、本論文で明らかにしたような、社会的養護措置解除後の実態をより長期にわたって正確に把握する必要があること、スティグマを伴わない権利としてのオプションに関する制度保障を底上げすること、その場合当事者の主体的な参画が鍵になることが指摘されている。

第4に、リガチュアについては、特に施設措置解除直後にそれまでの基盤だった施設のリガチュアが一気に減少するため、社会の中で新たなリガチュアを築いていくには、施設のリガチュアに限らない社会の広範なネットワークの形成が有効であり、その可能性をもつのが、経験の共有を基盤とした当事者によるコミュニティや「居場所」の形成であるとする。

第5に、社会的養護を巣立った若者の抱える「生の不安定さ」については、以上のようなリガチュアのもとで解決してゆくには困難な面があり、本研究では明確な解答を得たとは言えないが、自身の「生」を肯定する過程では、施設職員のかかわりだけでなく、当事者同士のかかわり等多様なリガチュアのなかで、自身の「生まれ」を知り、「生命」をつなぎとめる他者や経験を得て「生きる」ことへの意味付けを見出していくことで、自身の「生」を肯定的に受け入れていく可能性がみられたと語られている。その際、教育機会等のオプションも一つのきっかけになることが示唆されている。

おわりにでは、この論文によって得られたものと今後の課題について述べられている。

以上の永野論文について評価できる点は次のとおりである。

第1に、現代の大きな社会問題の1つとなっている社会的養護経験者の生活状況についてはこれまで体系的な把握が十分行われてこなかったため社会的対応が遅れていることに對し、本論文では量的アプローチと質的アプローチの両面から取り組み、一定の成果を上げていることである。

第2に、この課題の体系的な把握のために、政治社会学者であるダーレンドルフが論じた「ライフチャンス」の概念とその構成要素である「オプション」と「リガチュア」という概念を援用し、より体系的・分析的に社会的養護経験者の生活状況を描き出すことができたことである。すなわち、オプションとリガチュアを構成するカテゴリーを、社会的養護経験者へのインタビューの記録に対する質的分析法を通してより具体的に構成することにより、総じて社会的養護経験者の生活状況のどの面において社会的不利が発生しているかを体系的に記述することに成功している。

第3に、このような概念構成の工夫とともに、調査協力者を類型化する方法として、施設入所前（家庭と乳児院）、施設入所中、施設退所後という経時的な分類を用いて、「家庭復帰タイプ」「家庭からの入所・退所タイプ」「再保護タイプ」「乳児院からの入所・退所タイプ」という4つの類型を設定し、これに沿って21人の社会的養護経験者のインタビュー記録を構成しなおし、その特徴を一般化して提示しており、このような、概念構成と分析手続きを行ったことも重要である。

第4に、このような概念と理論の構成によって、量的データと質的データを分析した結果、社会的養護の下で育った若者たちの生活状況がライフチャンスという概念に基づいて体系的に記述されるとともに、ライフチャンスという概念では把握できない「生の不安定」という要素が析出され、それへの対応が必要であることを指摘できたことも大きな成果であるといえる。

第5に、以上を踏まえて、社会的養護経験者へのライフチャンスの保障に際しては、社会保障・社会福祉の制度面での底上げとともに、リガチュアによる選択の意味づけへの支援が重要であるが、さらにその前提として、本人の「生の不安定」に寄り添う支援が必要であることを指摘できたことは高く評価されてよい。

総じて、オプションの補充を中心にされてきた社会的養護での暮らしやアフターケアについて、とりわけ「生の不安定さ」がリガチュアに葛藤を生じさせ、オプションについての実質的な選択を困難にし、ひいてはライフチャンスに大きな影響を与える点を明らかにできたことは、今後の社会的養護制度やその実践に一石を投ずるものである。

なお、審査委員会においては、抽象度の高い一般概念を具体的なデータに結び付けて分析する際の手続きについて多くの意見が交わされた。また、本論文の作成にあたって貴重な情報を提供してくださった調査協力者に対しては、その心情を十分理解するとともに、だれに対してこの論文が書かれたかということを十分意識して執筆する必要があるなどの意見が出された。

これらの論点については、永野氏が今後の研究を進めていく上での課題として一層深めていくことを期待してよいであろう。



**【審査結果】**

以上、学位審査会における議論を要約したところであるが、本審査委員会は厳正かつ公平な審査の結果、永野咲氏の学位請求論文『社会的養護におけるライフチャンス保障―児童養護施設退所者の生活状況に関する量的・質的分析から―』は、福祉社会デザイン研究科社会福祉学専攻の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であるとの結論に達した。したがって、本審査委員会は全員一致をもって永野咲氏の学位請求論文は、本学博士学位（社会福祉学）を授与するに相応しいものと判断する。